

「共に創る、深い学び」

研究委員会委員長 天野義孝



上高井教育会の職能向上を目的とする事業の中で、教科等研究委員会は本郡の教育振興・発展に大きく貢献する事業です。本年度も、信州大学教育学部教授伏木久始先生を中心講師とし、13の教科等委員会を設けて研究を進めていきます。また全体の研究テーマを「子どもと共に創る授業の省察的実践」とし、学ぶ側の論理に立った授業づくりを目指し、各教科・領域の特性も生かす日々の授業改善につながる研究実践を積み重ねていきたいと考えます。

他方、二〇二〇年(小学校)二〇二一年(中学校)全面実施となる新学習指導要領において「どのように学ぶか」の授業改善のキーワードとして、主体的・対話的で深い学びが挙げられています。伏木先生からも、総集会の講演において「子どもの側に立った、共に創る授業づくり」に直結する学びとしてご指導をいただきました。各研究委員会においては、子どもと共に



目の前の子どもたちの力を伸ばし高めることは、私たち教師の使命です。『学び続ける』教師にとって、本研究委員会が先生方の指導力・授業力を高める研修の一つとなればと願っています。(小山小)



本校は、生活科や総合的な学習を核に各教科との関連を工夫した、学級ごとの学習指導計画「わくわくカリキュラム」(以下「わくわくカリ」)に取り組んでいます。地域の素材を生かし地域の方々につながることで、子ども達が主体的に探究する力を伸ばすことを目指しています。

その活動の一つが五学年の「田んぼ学習」です。知識と経験豊富な地域の方々とともに稲作体験をしますが、田植え、稲刈り、脱穀、収穫祭と、イベント的でした。そこで、昨年度は「わくわくカリ」を意識した通年の取り組みにしました。

四月、地図を手に、梓で囲んだ学校田を探す活動をしました。方角や地図記号を頼りに見事に発見。さらに、歩幅で田の縦横を計り、大体の面積も算出しました。

五月、定期的な田に通って観察。道徳で苗作りの教材を学習した子ども達は、JAながのの青年部にご協力いただき「すじ



自分でつくったゴボウシメを持ってパチリ

十一月。「収穫祭」。お世話に

まき」を体験。理科の植物の発芽・成長の学習とつながりました。立派に育った苗を自分たちの手で植えることもできました。また、田の水を採取し、顕微鏡で微生物の観察もしました。

十月、稲刈りは鎌を使い、麻紐で束にしていく作業です。地域の先生方にコツを教わりながら汗を流しました。おまけのイナゴ採りで手に入れた総量二百グラムのイナゴは、佃煮にして美味しくいただきました。唐箕や千歯こきなどの古い道具を使った脱穀体験もしました。

なった地域の方々に感謝を伝える大切な行事です。会場準備をしたり感謝の手紙を贈ったりして、和やかに交流できました。自分たちが育ててきた米をついたもちと、保育園年長さんと植えたサツマイモが入ったみそ汁は、格別な味でした。

昨年はさらに、地域の先生方に懇願し「しめ飾り作り」が実現しました。講師の先生方に手ほどきを受けた子ども達は、悪戦苦闘しながらも対のゴボウシメを作り上げました。家で紙垂をつけ飾ってもらい、新年を迎えたという子ども達がたくさんいました。

三学期は、算数「単位量あたり」の学習を生かし、収穫祭で使った分や保護者に販売した分などの記録から総収穫量の計算をして、一年間のまとめをしました。

三学年は社会科の「町探検」で、地域の方の案内とお話を聞く活動、四学年は国語や社会学習と関連させ、福祉施設を訪問しお年寄りや交流する活動といったように、学年の内容を見通して「わくわくカリ」を進めました。昨年度実施した「わくわくカリ」は、加除修正をして本年度に引き継がれています。今年の五学年はそれをベースに、新たに「田おこし」「代掻き」見学を実施しました。

今後も地域の方々のご支援をいただきながら、さらに子ども達がわくわくしながら力をつけていく学習を追究していきたいと考えています。(楠 千恵子)

声かけて、教育会の『わ』(話・輪・和)を広げよう!

同好会会長 寺島寿一



五月に行われた同好会世長会で「声をかけなければ、減っていく。声をかければ、増える」という話をしました。

すると、その世長会終了後、ある教頭先生が「早速、声をかけたら、入っていただけました」とおっしゃっていました。今年の上高井教育会への参

その一方で、上高井教育会の同好会の課題も見えてきました。「同好会員数の減少」や「何年も同好会会長が同じ」そして、「四月の時点で同好会員が世話係の教頭先生だけ」という厳しい実情もあります。

「働き方改革」と言われていますが、教師としての専門性を高める研修や日々の生活の質や教職人生を豊かにするため、同好会での学びや教職員のつながりは大変有意義なものです。

本年度も夏休み中、各同好会の講習・講演会・巡検等が企画されます。大勢のみなさんの参加をお待ちしています。(須坂小・須坂支援学校)

道徳教育同好会を紹介します

道徳教育同好会会長 長田みゆき

道徳教育同好会では、一学期に同好会員の道徳の授業を公開して、研鑽を深めています。子ども達の様子から、多様な価値観に触れることができているか、発問はこれでよいのかなどを考え合っています。

さらに昨年度は、夏休みの研修で旭ヶ丘小学校(現在は科野小学校)の湯本和子校長先生に

「道徳の評価について」
○道徳の評価について
『「特別の教科 道徳」アシスト2』の10ページに評価の例が書かれていること



○道徳の内容項目について
・小学校一、二年生19項目、小学校三、四年生20項目、小学校五、六年生22項目、中学生22項目については必ず扱うこと
・「わたしたちの道」「わたしの築く道しるべ」にある郷土に関する資料などを教科書と併わせて有効に活用していくことなどを、わかりやすく、丁寧に教えていただきました。

小学校では、道徳が教科になりました。子ども達の学びをどう評価したらいいのかということですが、大きな課題になりそうです。本年度はこの点を中心に研修できたらと考えています。(粟方丘小)

本校の宝 (72)

「先輩としてのポイント」

小布施中学校



本校の宝は、ズバリ「先輩としてのプライド」である。無形の宝である。

四月、上級生が一年生の教室へ出張し、校歌を指導する。お互いに歌い、先輩からアドバイスが出される。「下を向いていると声が飛ばないから前を向いて」「足をもっと開いた方がいい」内容は様々である。その後、五月に入ってから、全校が集まり各クラスが校歌を披露する「校歌歌合戦」がある。ここで下級生は三年生に完全に打ちのめされる。学年が上がるにつれ、校歌が洗練されるのは当たり前の事であるが、「歌に向かう覚悟」という点で、完全に打ちのめされる。おっかなびっくり歌っている自分たちを恥ずかしくさえ思わされてしまう。応援練習も同様に、上級生が手本となり進められる。四・五月のスケジュールはタイトであり大変だが、それだけの意味があると思える。

清掃交流会という縦割りでの清掃を行う活動もある。「こやれ」「あやれ」というアドバイスは特にない。三年生が自分の働く後姿で、下

級生に「清掃とは何ぞや」を語っていく。

朝の10分を利用してクラス対抗で競い合う「オブリンピック」。昨年の先輩が始めた生徒会活動であるが、ただ受け継ぐのではなく、学年の壁を取っ払ってクラス対抗にするなど、更に充実したものを目指す今年度役員のプライドも見せた。競技中の姿を見ても、リレーで他クラスがゴールしてしまっただ後も、全校の前で全力疾走を見せた三年生。一生懸命、全力でやる格好良さ、爽やかさを下級生にしっかりと見せてくれた。今年も鳳凰祭(文化祭)で、三年生が下級生の心をどれだけ「ドンッ」と動かしてくるのか楽しみである。これこそ本校の宝である。(川上 康樹)